

長野県佐久市北西久保遺跡発掘調査概報

長野県佐久市教育委員会

1970年3月

長野県佐久市北西久保遺跡発掘調査概報

1. はじめに

北西久保遺跡は、長野県佐久市大字岩村田北西久保 23681 に所在する。ここに公表する調査概報は、考古学という立場からは従来あまり手の届かなかった中世の墓制に関する報告である。本遺跡が提供する中世における埋葬様式の一例は、中世墓制を解明する糸口として、その意義は大きい。

本調査は、昭和 41 年の春に、地主である井上行雄氏が畑を耕作中、偶然に、土中より、五輪塔・一石五輪塔・笠塔婆・骨片等を発見したことに端を発する。その報を耳にされた、当時、上田市在住の県誌刊行編集副委員長宮下真澄氏が、同年 4 月、第 1 次の発掘調査をされた。このたび、文化庁・県教育委員会・市教育委員会の三者の協力で、本遺跡の第 2 次調査が行われ、調査担当者として倉田芳郎がこれにあたり、調査補助員として、駒沢大学考古学研究会の学生があたった。

2. 第 1 次調査の概要

本遺跡は、前述のように昭和 41 年 4 月に宮下真澄氏を調査担当者として、第 1 次の調査が行われている。その結果、埋葬箇所が 7 箇所 L 字形に、つまり鍵の手のように広がっていることが確認された。それらは等間隔に配置され、1 箇所の広さが、 1.8m^2 であった。いずれも、地表から 1.2m の所に河原石を敷き、その上に、厚さ 20cm の玉石を敷き、さらに又河原石を敷いてあった。骨片は、玉石の中から発見された。

出土遺物は、五輪塔 3、一石五輪塔 5、同台石 5、笠塔婆 3、異形婆 2、板碑 1、不明石器となっている。そしてさらに、骨は火葬にされ、壺は用いずに直接玉石の中に納めたこと、玉石は千曲川のものを使用していること、1 箇所に数基の塔婆を安置する供養法もあったこと等を確認した。最後に、本遺跡は五輪塔の細部手法により、鎌倉中期以前だとしている。

3. 遺跡の概観、及調査概要

岩村田の町を形成している台地が、千曲川の支流、湯川によって侵蝕され、南面する約 6 度の傾斜をもった段丘涯の斜面上に、本遺跡がある。海拔は約 680m で、南側の一段低い所は水田地帯となっている。つまり、小海線岩村田駅の南南西約 2km、根々井部落の北東約 1km の



第 1 図 北西久保遺跡地形図

地点である。北に浅間山，南に八ツ岳を望む景観の地で，付近には，土師器散布地や古墳などがあり，遺跡も多い。

この斜面に 5×5m のグリッドを組み，南北をアルファベット，東西を算用数字で示した。そして，双方のラインが交わる北東の点をそのグリッド名とした。最初，南北 2m×東西 4m の範囲を掘り下げ，順次広げて，最終的には 210m² の範囲を発掘した。本遺跡はおおよそ 2 つの層位から成り立っている。第 1 層は表土で，有機物を多量に含み，暗褐色を呈している，小石が多量につまっており，完全に攪乱されている。厚さ 60~70cm。第 2 層は表土との見分けが難かしいが，小石の量が少くなり，下層のかたいローム層が混って黄褐色をおびてくる。厚さ 20cm。遺物，遺構は，第 1 層の下部から第 2 層にかけて発見された。

4. 遺 構

本遺跡の発掘調査において発見された遺構は，大別して 2 種類にわけられる。1 つは，弥生時代に属する土壇墓と思われるもので，もう一つは，われわれが求める中世の火葬墓である。

前者は7ヶ所、後者は3ヶ所発見された。ここでは後者を中心に説明を加えてゆく。後者を便宜上、北から順に、A、B、C各地点とした。

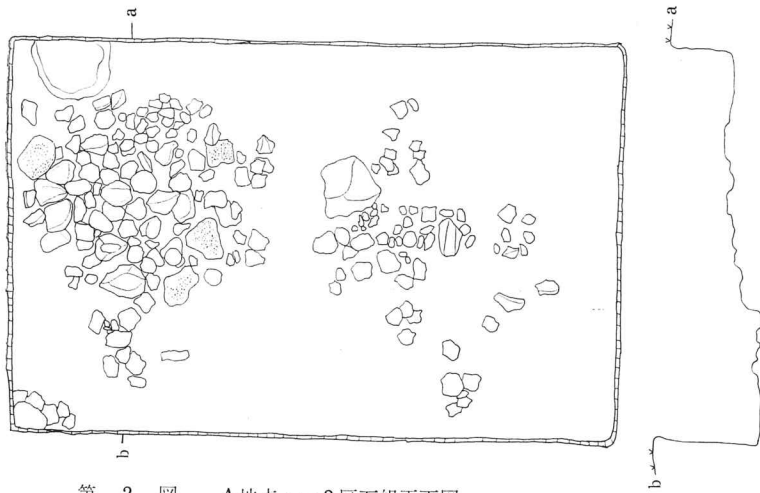
○A 地点

4つのグリットから成っている。D—2区では(第2図、図版Iの1)、30cm から40cmの間隔をあけて、大小、2つの石組が東西にならんでみられる。大きい方は、2.5m×2m、小さい方は、石が散っているが、2m×2mである。双方共、南壁より、70cmの所で一段低くなっており、高低差は30cmである。下段の配石は東西方向にのびており、南北には広がっていない。これは、大小2つの石組は、従来、1つのものであったか、もしくは、同じ所にならんで2つの墓があったか、不明である。前者の場合だとすれば、上段の石組は従来、4.5×2mの広がりを持っていたことになる。上段は地表下約50cm、標高は約679.20mであり、下段は地表下80cm、標高は、678.90mを数える。上段、下段共に、使用されている石は河原石で、近くの湯川のもを運んだものであろう。石は、大きいもので約35×25×10cm、小さいもので約8×5×5cm、最も多いのが、20×15×10cm大である。上段の石を取りはずすと、下段の配石は認められず、他に遺構らしきものも発見できなかった。

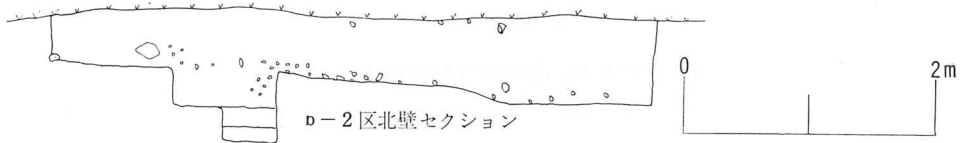
c—3区の西側、ほとんどDライン上に、南北一列に並ぶ大きな石の配列が見られた(第5図、図版Iの2、4)。石は全部で8個あり、南側の3個は偏平で長方形をしており、大きさは約100×80×30cm平均で、西面した約60度の傾きをもつ。それに接して、約20cm浅い所に、40×40×30cm大の石が並んでいる。この配石は、長軸が、ちょうど南北を示すように、規則的におかれており、そのまま北へのばすと、b—2区でみた下段の配石の東端にあたる。

D—3区では(第6図)、C—3区でみた大きな石の配石で区切られるような状態で、10×7×5cm大の小石が、2×1mの範囲で敷かれていた。従来はもっと広く、特に南へのびていたものであろう。南面する約25度の傾きがある。小石は、河原石と割石が半々の割合である。東側は区切られた状態であるのに対し、西側は何ら、同様の遺構は発見できなかった。E—3区では、160×120cmの範囲で石組が発見された(第3図、図版Iの3)。この石組はD—2区で発見された石組と比較すると、多少ちがいが見られる。D—2区では、ほぼ平均した大きさの石を数多く使っているのに対し、ここでは、大小の差がはげしい。大きいものは、50×40×20cm、小さいものは、5×5×5cmぐらいである。小さい石は大きい石と大きい石のすき間をうめる様に、まわりをかこむように置かれている。ここでも南側が一段低くなっているが、ここでは下段に石組が見られる。上段は地表下約90cm、標高約679.70m、下段は地表下約140cm、標高679.20mである。小さい石をとりのぞくと、大きい石は集中しており、3個の大きな石は、内側をむく辺が三角形をなす形で配石されていた(第4図)。この石の下からは、何も発見できなかった。

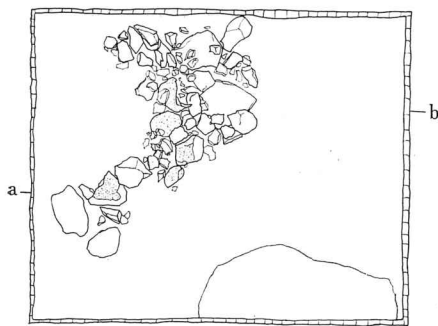
以上、A地点をグリット毎に見て来たが、ここで整理してみると、石の使い方に多少ちがいはあったが、2ヶ所の石組が発見された。双方共、段がついているが、D—2区では上段に、



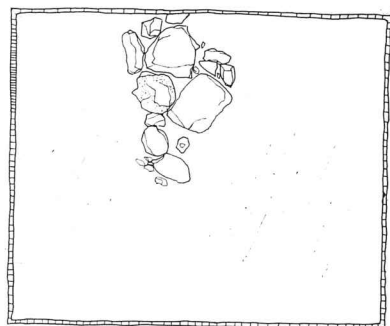
第 2 図 A地点d-2区石組平面図



d-2区北壁セクション



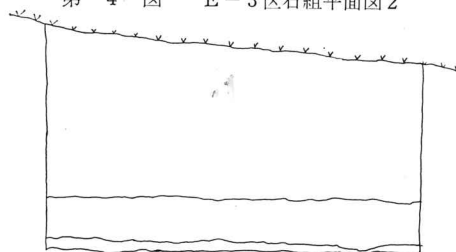
第 3 図 A地点E-3区石組平面図1



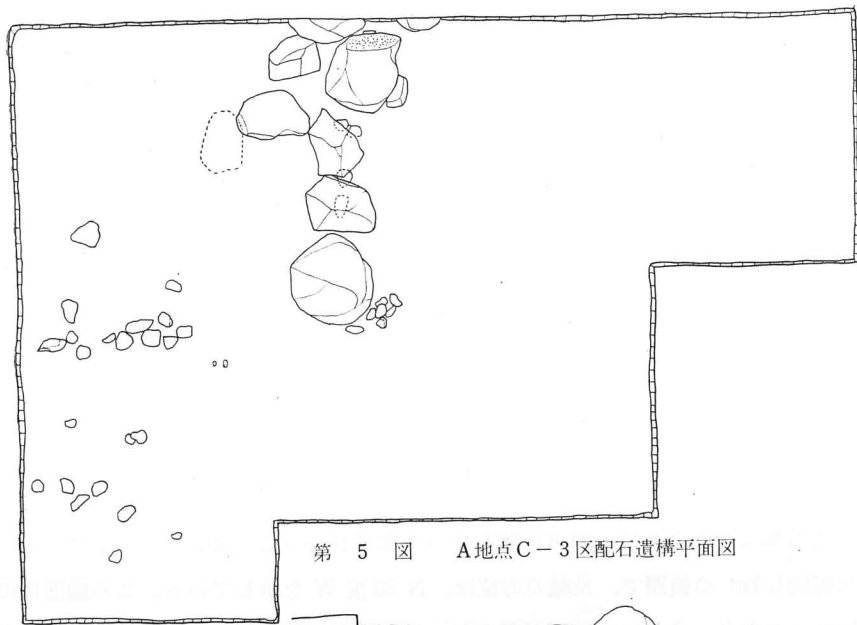
第 4 図 E-3区石組平面図2



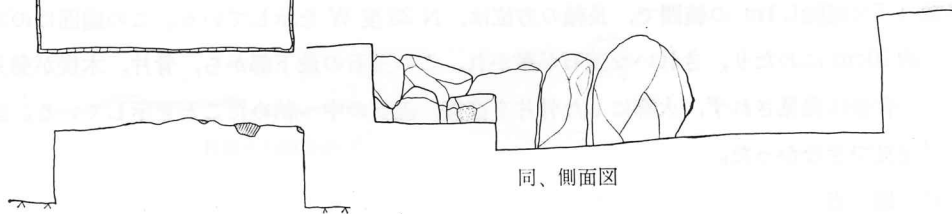
同、断面図



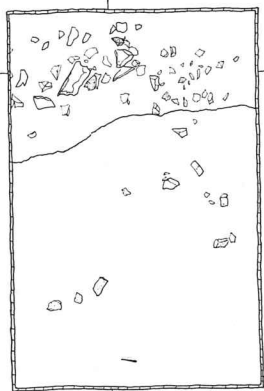
E-3区、東壁セクション



第 5 图 A地点C-3区配石遺構平面图



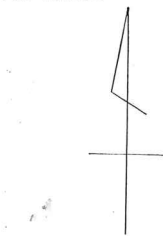
同、側面图



第 6 图 A地点D-3区平面图



同、断面图



E—3区では下段に見られた。

D—2区では、下段の配石が東西にのびており、上段の石組の限界までつづく。その南側C—3区では、南北一列に大きい石の配列が見られ、北にのぼすと、b—2区の石組の東端に接する。その西側、Dの3区では、約25度の傾斜をもって、小石が敷かれている。以前は、もっとゆるい傾斜であったが、もしくは割石が多いことから、階段がついていたかもしれない。いずれにせよ、この小石は、墓まで行くためにもうけられた道、もしくは階段があったのではなかるうか。

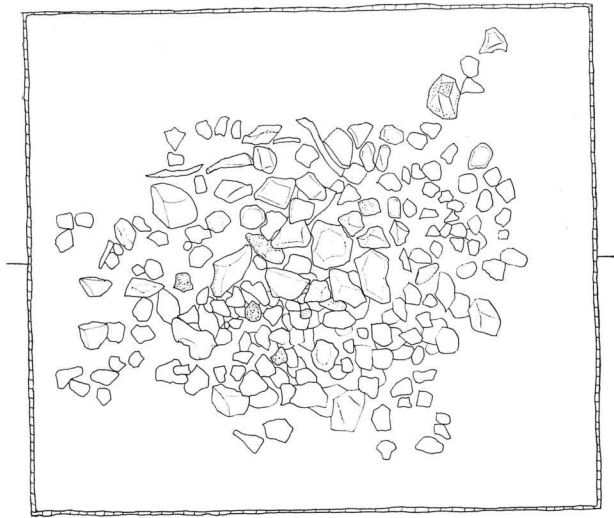
○B 地点

G—4区からG—5区にかけて、3.6m×3mの、東西に長い長方形の範囲に石組が発見された(第7図、図版Iの5、6)。地表下約65cm、標高約679.50cmである。35×30×20cm位の石が中央から北にかけて集中しており、それをかこむようにして、20×20×10cm位の石が南側、西側にある。南側はやはりさがっているが、A地点のように、段をなさず、約17度の傾きをもつ傾面になっており、傾面にも石組が広がっている。石組の最も低い所の標高が約679.20mである。集中している大きな石をはずすと、50×50×10cm位の、うすい石を数枚使って、ほぼ正方形になるように、四方を囲んである遺構があった(第7図、図版IIの1、2)。長軸1.5×短軸1.1mの範囲で、長軸の方位は、N23度Wを示している。この範囲にのみ、厚さ約20cmにわたり、きれいな玉石が敷かれ、この玉石の最下部から、骨片、木炭が発見された。骨壺は発見されず、火葬にした骨片を直接、玉石の中へ納めたことを示している。副葬品は発見できなかった。

○C 地点

地表下約60cmのところから、約2.5×2mの範囲で石組が発見された(第2図、図版II—3、4)。石組の東側は約20度の傾斜をもつ斜面になっており、斜面の行きつく所にも小さな石組が見られる。上段の標高は約679m、下段との差は45cmである。A地点のE—3区のように、石の大小の差がはげしい。大きいもので、約40×35×20cm位、小さいもので、10×10×8cm位である。E—3区、およびB地点同様、大きい石が集中するところがあり、小さい石は間につめてある。大きい石をとりはずし、掘りさげてみても、地点同様、下からは何も発見できなかった。下段の小さい石組との関係は不明である。

以上、A、B、C各地点を大まかにみてきたが、ここで整理してみると、石組は大小合わせて5つ、そのうちの主な3つが、各地点を代表するものである。各地点共通して言えることは、段、もしくは斜面をもつこと、現地表面のもの傾斜角は約6度であるが、石組のもつ傾斜角は20度～25度である。又、石組が見られる面は、ほぼ平坦で、いずれも、地表より約50～60cmである。使用している石は全て、河原石である。相違点としては、BC両地点で使用されている石は、大小の差がはげしいのに対し、A地点ではほぼ平均している。又、BC両地点は石組

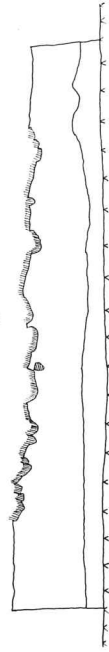


第 7 図 B地点石組平面図1

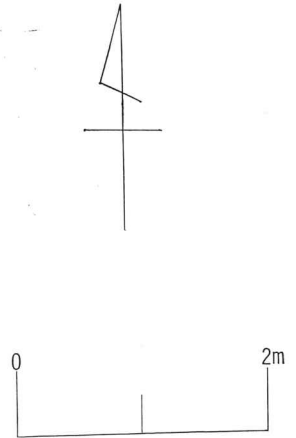


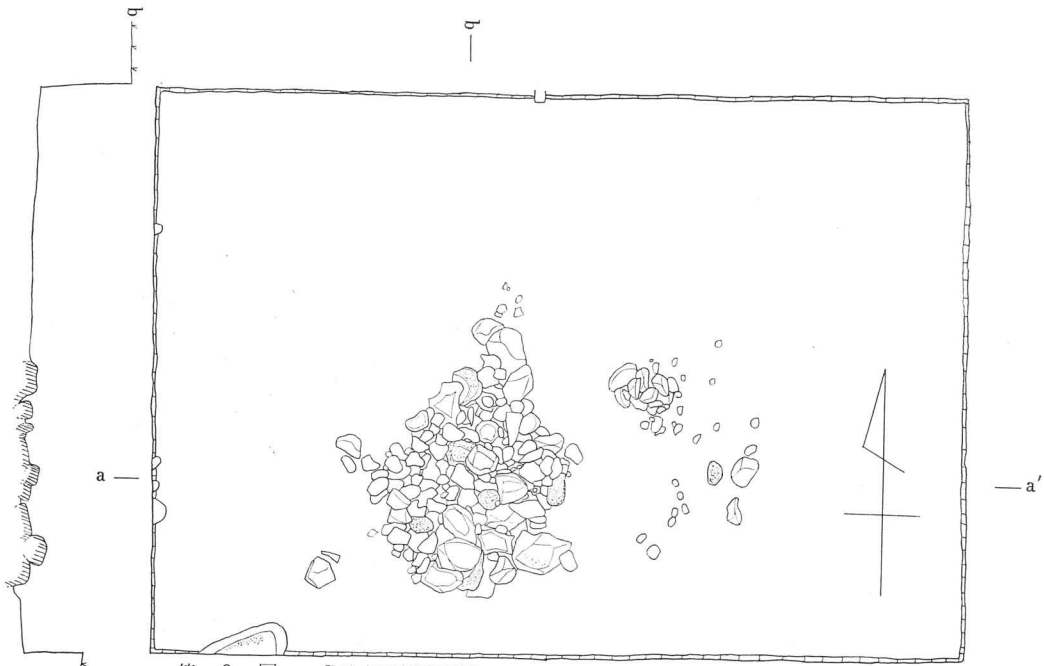
B地点石組断面図

B地点G-5区北壁セクション



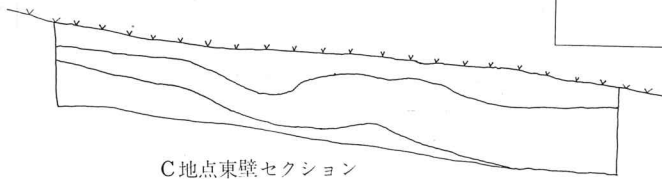
第 8 図 B地点石組平面図2



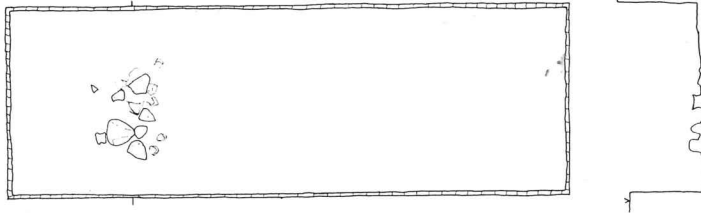


第 9 図 C地点石組平面図

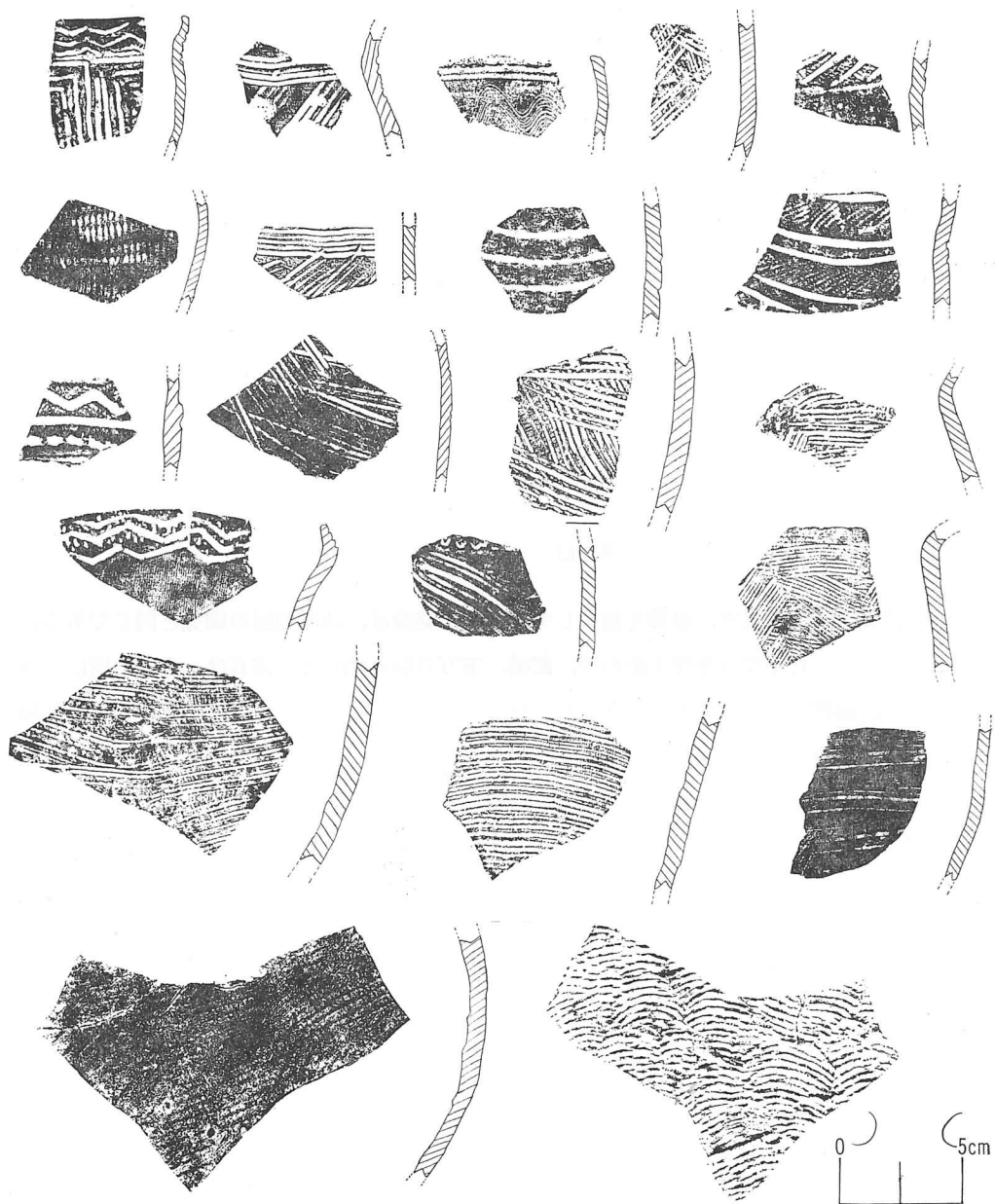
C地点断面図



C地点東壁セクション



第 10 図 土壇墓配石遺構平面図



第 11 图 北西久保遺跡出土遺物

の南側、東側に、20度前後の斜面をもつものに対し、A地点は段になっている。同じ斜面をもつていても、B地点は斜面にも石組が続いているが、C地点にはない。石組の中心部に使われる石の大きさは、A B両地点共、大差はないが、C地点は、ひとまわり大きい石を使っている。しかし、3地点共、細かくみてゆくと、共通する点、相違する点はあるが、年代は、3地点共ほぼ同じ時期であることは明らかである。

5. 遺 物

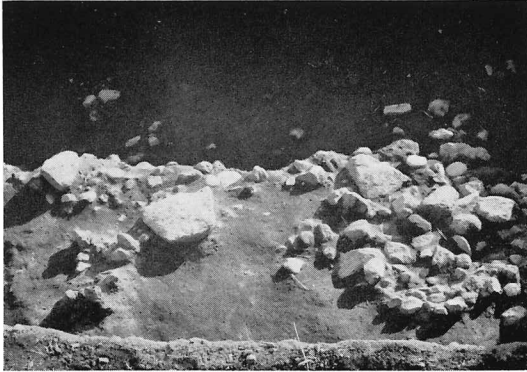
遺物は、第1次調査の際、多数出土しているので今回の調査では少なく、笠塔婆の頭部1点(図版Ⅲ)、前回の調査で不明石器として報告されたもの3点のみである(図版Ⅲ)。なお、調査終了後、地主である井上行雄氏が畑を掘りかえた際、笠塔婆が1点、B地点付近より出土した。

弥生時代の土壙墓からは(第10図)、弥生式土器の破片が出土し(第Ⅱ図)、遺構は発見できなかったが、縄文後期晩期の土器片、石斧、須恵器、埴輪片等が出土している(第Ⅱ図D)。笠塔婆および同頭部は、前回の調査の折出土したものと同じで、前回の調査で掘り残されたものであろう。

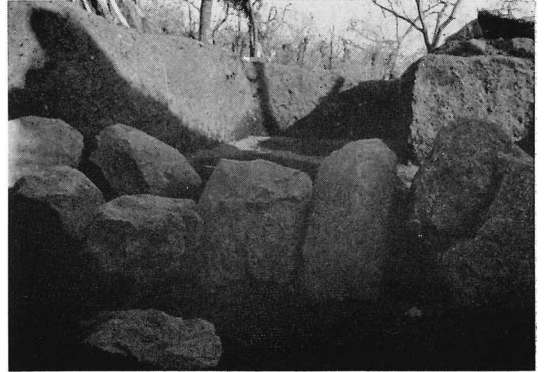
6. む す び

以上、調査の概要、遺物、遺構を紹介してきたが、結論は、ほぼ前回の調査と同じである。つまり、火葬にした骨片は骨壺を使わず、直接、玉石の中に納めた。玉石は一定の範囲にのみ敷れている。副葬品は1点も発見できなかった。しかし、時代については、前回と異なる結論を出した。前回調査の五輪塔を実見して、火輪の軒の張り具合、文字の刻み方からして、南北朝時代、もしくは、それ以後のものと考えられる。五輪塔については、「餓鬼草紙」、「法然上人行状画図」、「十界図」などの絵巻物によって、その様子をうかがうことができる。五輪塔は、鎌倉時代後期から室町時代に最も盛んになり、室町にいたっては、墓標、すなわち五輪塔というくらいに普及した。五輪塔は一般に古いものは水輪が角張っており、鎌倉期には下半分がすぼまってきて、室町に入ると、すぼまりすぎて弱い感じをうける。火輪は古いものほど軒のそりがゆるく、鎌倉期に入ると軒が厚く、両端に向かって強くそり、両端は垂直に立つ様になり、さらに新しくなると、中央部で薄く両端で厚くなるものとされている。

本遺跡の場合、南北朝以後としておくのが妥当であろう。



A-1 A地点, D-2区石組 北より



A-2 C-3区配石 西より



A-3 E-3区石組 南より



A-4 D-3区配石 南より



A-5 B地点, 石組 北より



A-6 B地点 石組 東より



B-1 B地点 石組 南へり



B-2 B地点 石組 南より



B-3 C地点 石組 北より



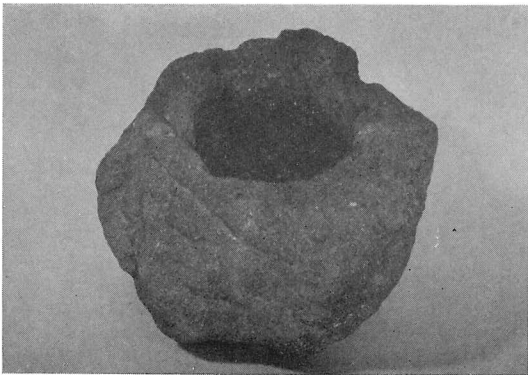
B-4 C地点 石組 西より



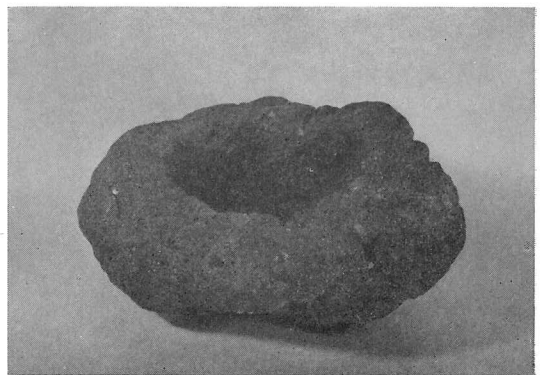
不明石器 1



笠塔婆の頭部



不明石器 2



不明石器 3

1970年3月31日 発行

長野県佐久市北西久保遺跡発掘調査概報

発行 長野県佐久市教育委員会
長野県佐久市中込 3051